

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2009

課題番号：19730382

研究課題名 (和文) 集団間の信頼・協力関係形成に関する社会心理学的研究

研究課題名 (英文) Social Psychological study for intergroup trust and cooperation.

研究代表者

熊谷 智博 (KUMAGAI TOMOHIRO)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：20400202

研究成果の概要 (和文)：戦争や民族問題などの集団間での葛藤を解決するには、相手に対する報復を止め、相手を信頼し、協力関係を築くことが重要である。しかしその際に、自分の所属する集団への愛着や愛国心などがそのような信頼や協力に至る際の障害となり得る。そこでそのような自集団への同一化の程度が相手集団に対する報復を抑制している過程を明らかにした。更に集団同一化のどのような側面が外集団に対する信頼・協力関係を阻害しているのかを検討した。

研究成果の概要 (英文)：To resolve an intergroup conflict such as war or ethnic antagonism, it is important to restrain retaliation, trust other, and build cooperative relationship. However, commitment to their group or patriotism can makes it difficult to trust in and cooperate with outgroup. In this project, it was revealed that the psychological process how an ingroup identification enhanced retaliation against outgroup. Moreover, it was also examined what aspect of group identification made intergroup trust and cooperation difficult.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2007 年度 | 600,000 | 0 | 600,000 |
| 2008 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2009 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,400,000 | 540,000 | 2,940,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：集団間関係、社会的公正、集団同一化

1. 研究開始当初の背景

人々が他人を信頼する際の心理過程に関して、先行する信頼研究では主に個人が他人に対して信頼する心理過程を中心に

検討している。しかし現実社会では個人としてではなく、集団という単位で他集団を信頼したり協力したりする必要がある。このような他集団との信頼

関係については先行する信頼研究では主に集団同士がどのような関係にあるか、例えばどちらがより有利な立場にあるか、という構造的な観点から検証されてきている。それに対して集団に属する人々が、自集団と他集団をどのように見ているかという評価の仕方が、他集団への好意的な態度と信頼を形成する問題に関しては殆ど検討されてこなかった。本研究ではこのように、集団間関係を構造的な観点だけではなく、他集団への評価という認知的影響の点から検証することによって、集団間関係の構築に新たな知見を提供する。

人々が自分の所属する集団に対して好意的な評価をしている場合には、その集団への貢献が増すことは既に De Cremer and Tyler (2005) が報告している。これに対して、本研究ではその様な自集団への肯定的な評価と外集団への好意的な評価を両立させる可能性について検討する。これは Turner ら (1987) に代表される、社会的カテゴリー理論の知見とは一致しない予測であるが、本研究はこの理論を拡張して、新たな心理過程の解明を行うということが期待できる。

2. 研究の目的

自分が所属する集団の持つ魅力は、人々の他人や他集団に対する敵対的な傾向を強める大きな要因となっており、現実の国内・国際社会においても同様の事例が多く報告されている。一方、攻撃行動ではなく、協力といった建設的な行動に集団の持つ魅力が影響する点については、主に企業組織に関する研究を中心に、集団内での影響のみがこれまで研究されてきた。しかし、これまでの研究は、集団の持つ魅力と集団間関係の良好の関係について検討していない。

そこで本研究では、日本と欧米の人々を対象として、他集団に対する協力的な関係や信頼関係の形成において、自集団をどのように評価するかが、自集団への態度だけではなく、他集団への好意的な態度の形成を促す可能性について検証する。

3. 研究の方法

集団間での協力・信頼関係の形成について検討するために、第一に加害者に対する信頼と寛容が自動的に喚起される過程について検討した。特にそれは加害者が内集団成員か外集団成員かの違いによってどの程度異なるのかを検討するため、日本とオランダ (Radboud大学 Nijmegen校, Johan Karremans准教授との共同研究) にて実験を行った。実験参加者は被害場面のシナリオ読み、その後寛容に関する概念が思考の中で活性化している程度を測定した。その際に、加害者の国籍を自国民と外国人とで変えた場合に、加害行為に対する寛容さや加害者

への信頼感にどのような差が生じるかを両方の国で測定した。

続いて、集団間での協力・信頼関係の形成について、それらを阻害する要因としての集団同一化に注目し、実験室実験にてその効果を検討した。具体的には分配的公正、手続的公正という二つの社会的公正が集団同一化を強め、それが集団間葛藤を激化させる過程について検討した。社会的公正感を操作する際には、分配的公正では宝くじの分配課題を用いた。自分と同じ集団のメンバーが自分に対してくじを平等に分配してくれる (公正条件)、あるいはその同じ集団のメンバーは自分が多くのくじをもらうために、参加者には少ししかくじを渡さない (不公正条件) という2つの状況を設定した。一方、手続的公正は集団での意思決定の際の発言機会を操作した。具体的には集団での意見をまとめる際に、リーダーが他のメンバーに意見を求めるか (公正条件)、リーダーが独断で決めてしまうか (不公正条件) という2つの状況で比較した。実験参加者は公正さを経験した後で、同じグループのメンバーが被害を受けている様子を観察し、その人の代わりに加害者集団へ報復する機会が与えられた。この報復の強さが集団同一化によってどれくらい強まっているかを測定した。

また東京都民450名を対象とした社会調査を行った。これは申請者がこれまで行ってきた実験室実験の生態学的妥当性を検証したものである。特に集団間の協力関係を阻害する要因としての集団同一化の、どのような側面が強い悪影響を及ぼしているかを検討するために、日本国民としての同一化を「愛国心」と「ナショナリズム」の二つに分け、集団間関係に対する両者の影響の違いを検討した。なお社会的公正の測度は国内の知覚された公正さを用い、日本はどの程度公正な社会であると思うかといった項目で測定した。ナショナリズムと愛国心に関しては Karasawa (2002) の National identity 尺度を用いた。そして国際的不公正感に関しては日本が諸外国から不当な評価を受けていると思う程度を測定した。また外国に対する態度として中国に対する態度を測定した。

4. 研究成果

本研究の目的は、葛藤が生じた集団間関係において、信頼と協力関係を作り出すにはどのような心理過程が必要であるかを明らかにすることであった。特に本研究では集団の成員であるという意識の強さ、即ち集団同一化の程度がそれを阻害する過程について焦点を当てて検討した。

加害者への信頼・協力を形成するためには受けた被害に対して報復を行わない寛

容性が必要である。この寛容性に関して、集団同一化はそれを阻害する事が予想されていた。つまり集団同一化が強い場合には、外集団から受けた被害に対してそれを「無かった事」にできず、報復せずにはいられないと言う気持ちを強めるのではないかと言う点について実験を行った。実験はオランダ人と日本人の二つの国で行い、その結果を比較したが、日本人はオランダ人に比べて、内集団への同一化が弱いときには比較的寛容であるという結果が得られた。特にこの寛容さは本人が意識することなく、自動的に生じるものであった。このことから日本人に関して言えば、受けた被害に対してそれを許してやろうと言う気持ちは自動的に生じるが、それは集団に対する同一化が弱く、それだけ被害を自分のこととはあまり考えない人だけであることが明らかになった。反対に集団同一化の強い人は、受けた被害を無意識的には許してやろうと考えるけれども、集団成員の受けた被害を自分が受けたものと同一視してしまう。その為許してやろうと言う気持ちよりも、報復しようとする気持ちの方が強まり、その結果、加害者集団に対する信頼と協力関係の形成は困難になってしまうといえるだろう。

次に本研究では実際の報復行動の変化と集団同一化の関係を検討した。上記の研究では報復的態度の測定をしていたが、実際に相手に報復するかどうかは検討していない。態度と行動の不一致は多くの研究で指摘されていたので、本研究では実際の攻撃行動を測定し、集団間の信頼と協力を集団同一化が困難になる過程を検討した。実験の結果は分配的公正（くじの平等な分配）、手続的公正（集団意思決定での発言機会）は共に集団同一化を強めていた。そしてその集団同一化が強まった人々が、集団が受けた被害を観察すると、その加害者集団に対して実際に攻撃行動を強めていた。このことは集団内の公正さは集団間関係を悪化させるという皮肉な関係を示している。即ち自集団をより公正な集団にしようとするれば、それだけ集団同一化が強まり、その結果他集団が自集団に対して行った否定的行動に対して仕返しを使用という気持ちがより強まる。その結果集団間関係は悪化するので、集団間の信頼・協力関係の形成もより困難になるということがいえる。

一連の実験室実験の結果を受け、本研究では得られた知見が現実も問題でも当てはまるかを検討するために社会調査を行った。更に、これまでの研究結果は集団同一化が集団間信頼・協力を抑制する要因として影響する事を示してきたが、集団同一化そのものはあまり詳しく検討していなかった。従って集団同一化のどのような側面が特に集団関係の悪化を招き、どのような側面は同一化と集団

間信頼・協力関係と両立するかを検討した。結果は日本社会を公正だと思っている人ほど日本に対して強い「愛国心」と「ナショナリズム」を持つことが確認された。しかし両者のうち、「ナショナリズム」だけが国際的な不公正感を介して外集団である中国への信頼感や協力し合おうとする気持ちを低下させていた。一方の「愛国心」は中国への信頼・協力とは無関係であった。この結果は他集団に対する優越性認知に基づく「ナショナリズム」に関しては、本研究のこれまでの研究モデルと一致するものであった。しかし自集団への好意である「愛国心」が集団間信頼・協力と無関係であったことを示している。集団内公正とその結果生じる集団同一化は必ずしも集団間関係を悪化させるわけではなく、信頼・協力関係と両立可能であると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① Tomohiro Kumagai, The effects of social exclusion and acceptance on third party aggression, *Tohoku Psychologica Folia*, 査読無、Vol. 68, 2010(印刷中)
- ② 熊谷智博、紛争介入と非人間化：非当事者集団による集団間葛藤への介入と紛争被害の有無が紛争加害者及び被害者の非人間化に与える効果、文化、査読無、73巻、3・4号、2009、pp. 47-61.
- ③ 熊谷智博、大淵憲一、加害者集団の実体性が非当事者攻撃に与える影響、文化、査読無、73巻、1・2号、2009、pp. 39-52
- ④ 熊谷智博、大淵憲一、非当事者攻撃に対する集団同一化と被害の不正さの効果、社会心理学研究、査読有、24巻、3号、2009、pp. 200-207

〔学会発表〕（計7件）

- ① 熊谷智博、川嶋伸佳、浅井暢子、集団内公正が集団間公正認知に与える効果、日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会、2009年10月11日、大阪大学
- ② Tomohiro Kumagai, Does fair government engender inter-national conflict? The ironical relationship between intra-national justice and inter-national justice, *Political Violence and Collective Aggression: Considering the Past, Imagining the*

- Future, 5th, September, 2009, Belfast, UK.
- ③ Tomohiro Kumagai, The power and “Kantian imperative” : The effect of power salience on interventional decision in the loop dilemma situation, The 17th annual meeting of the European society for philosophy and psychology, 27th, August, 2009, Budapest, Hungary.
 - ④ Tomohiro Kumagai, Nobuyoshi Kawashima, Nobuko Asai, The effects of intranational justice on the international justice, 22nd annual international association for conflict management conference, 16th, June, 2009, Kyoto, Japan.
 - ⑤ Tomohiro Kumagai, Kees van den Bos, The Machiavelli effect of power priming on moral dilemma, The 10th annual meeting of the society for the personality and social psychology, 6th, February, 2009, Tampa, USA.
 - ⑥ 熊谷智博、Kees van den Bos、道徳的ジレンマに対する勢力プライミングの効果ー間接プライミングによる「マキャベリ効果」の検討ー、日本社会心理学会第49回大会、2008年11月3日、鹿児島県民交流センター。
 - ⑦ Tomohiro Kumagai, The effects of implicit self-esteem on moral dilemma, 15th General Meeting of the European Association for Experimental Social Psychology, 13th, June, 2008, Opatija, Croatia.

[図書] (計4件)

- ① 熊谷智博、丸善、社会心理学事典、2009年、pp. 446-447.
- ② 熊谷智博、北大路書房、シリーズ21世紀の社会心理学：葛藤と紛争の社会心理学、2008、pp. 51-61.
- ③ 熊谷智博、北大路書房、社会心理学概説、2007、pp. 126-128.
- ④ Tomohiro Kumagai, Trans Pacific Press, Social Justice in Japan: Concept, theories, and paradigms, 2007、pp. 171-191.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 智博 (KUMAGAI TOMOHIRO)
東北大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：20400202